が出來ぬ、只だヤールカンドの邊で文字が婆羅門と同じと書いて居るだけである、次で玄奘の西域記になると（六百二十九年より六百四十五年に亙る）記載は餘程細密になつて來て諸國の有樣も大分詳しく知ることが出來る、其阿耆尼國卽ち今のカラシャールの條下に『伽藍十餘所、僧徒二千餘人習學小乘教說一切有部、經教律儀旣遵印度、諸習學者、卽其文而翫之』といひ、また屈支國卽ち今のクッチャの條下でも同じく『伽藍百餘所、僧徒五千餘人習學小乘教說一切有部、經教律儀取則印度、其習讀者卽本文矣』と書きカシュガールの條では『其文字取則印度、雖有刪譌、頗存體勢……習學小乘教說一切有部、不究其理、多諷其文、故誦通三藏及毘婆沙者多矣』とし、ヤールカンドでは『文字同瞿薩旦那國言語有異…　而此國中大乘經典部數、尤多』といひ、コータンでは『文字憲章聿脩印度、微改體勢、粗有沿革、語異諸國崇尙佛法』と書いて居る、其他高僧傳などを讀んで見ても、大概同樣の記事にとゞまつて居る、此等前後二百五十年間許りに亙る種々の紀行及び西方の事情をかいたものに、梵語の經典を諸國に翻譯したことが見えて居らぬとすると、贊寧の梵經が嶺北諸地に譯せられて居るといふて居るのは、訛りであるか或は玄奘より後の事情を書いたものと見ねばならぬ樣に思はれるけれども、事實は反りて贊寧の言ふ所に與して、法顯や玄奘などの記載がよし訛りでないまでも、少くとも粗漏であることを證據だてゝ居る。

其事實を語るには先年來東洋學上の新發見としてもて囃されて居る、獨逸の中央亞細亞探檢隊の得た結果を借らねばならぬ、普魯西王立學會の哲學史學部の千九百七年の報告に F. W. K. Müller 氏は Beitrag zur genaueren Bestimmung der unbekannten Sprachen Mittelasiens. なる題下に Tochara（覩貨羅）の言葉に佛典が翻譯せられて居た者であることを紹介した、此覩貨羅の言葉といふことについては少しく說明して置く必要があらうと思ふ、